Ⅰ　は　じ　め　に

1.　研究経過

昭和61、62年度にわたり、本校では創立以来３回目の教育課程の編成にあたってきた。今回は養護学校の義務制実施からのおおよそ10年間の指導成果をまとめるかたちで、それはとりもなおさず、子ども達の障害が重度・重複、多様化の一途をたどる中での指導の対応を物語るものであったといえよう。とりわけ自閉傾向児の激増に伴い、そのかかわり方、指導のあり方については論議をよび、それが研究をおしすすめてきたともいえよう。

また、この間、挑戦学習（高等部）、ゲームによる学習（中学部）といった新しい学習の試みが見られ、今後とも実践研究がなされていくことになろう。

ところで、新しい教育課程が編成された時、その時点でそれは過去のものだといったことがいわれる。その意味では、今日の時点での到達した試案ともいわれるわけで、今後とも実践を重ねて、内容の吟味、検討をしていかなければならないと考えている。

そこで、今年度の研究の方向である。

従来の小中高別に動く実践研究、全体研究は、今後とも継続されていくものだが、他方、教師一人ひとりが持っている関心課題、分野をとり上げて研究に生かす方向もあるということ。また全体研究ではどうしても、とりあげにくい分野、あるいは、陽の目をみなかった分野、内容があって、これをなんとかならないものかということもあり、これらの事を考えて本年度はいくつかの少人数のグループによる課題別の研究に重点をおいてすすめることにした。

2.　研究概要

(1)　研究主題

児童・生徒の障害の重度、多様化がもはや当り前の今日、大きな教育目標における適応主義から自己実現への転換は当然ともいえるものであろう。私たちは、子ども一人ひとりの障害を直視しながら、その成長、発達を援助していくことが重要な任務といえる。

その意味で、主題を「発達と障害に応じた指導」とし、そして、それぞれのグループに別れて研究に入った。

(2)　研究グループ（課題）

最終的には、６つの研究グループにわかれ、ＰＴＡの分科会とあわせて、７つの分科会をもつことになっていったわけである。それでは、この７つの分科会（研究グループ）がどうしてできてきたのか、その必要性や意義、あるいはその内容や方向を簡単に述べて概要としておきたい。

①　教科の学習と生活について考える

このグループの目的は、教科と生活学習の授業について見直し、子どもに合った生活の

中で、教科独自の感じ方、捉え方を育てるような新しい形の授業を考えることにある。障害の重度化・多様化にともなって、指導の難しさから教科学習をなくしたり、生活学習だけで一日の流れをつくったりする学校が増えてきている。そこで、教科そのものをもっと子どもの生活のレベルで捉え直し、子どもの理解のみちすじにあった学習の展開ができないかと考えた。教科か生活かというのではなく、「子どもの生活を大切にした教科」「教科の考え方を組みこんだ生活」とは、どういう形があるだろうかということを実践を通して、考えていきたい。

② 授業の中の〝ものづくり〟について考える

子ども一人ひとりにあった授業をめざす時、その能力差を我々は絶えず意識することになる。その能力差を補いかつみんなが楽しく参加できる授業をどのように考え、どんなものがよいのか考えることになる。その一つとして〝ものづくり〟を取り上げることにした。ところで、遊びはこの教育の中でも重要な位置を占めるといわれる。今回の「つくって遊ぶ」も〝遊び〟を前提にして〝つくる〟という活動を取り入れた授業で、子どもの発達段階にてらして、みんなが楽しめる適当な内容や題材には、どのようなものがあるかを探ることにした。

③ からだづくりについて考える

わたしたちは、姿勢や体の動き、体力面など、からだについて考えさせられる子どもたちを見てきている。その多くは「遊びが下手である」とか「遊びを知らない」といった子たちであり、休み時間では「なんとなくブラブラしている」のが実状である。

ところで、私たちの少年時代、隣近所のワンパク集団にあって、共にかけずり回って遊び、ガキ大将のもとで一定のルールに従って行動しながら「社会性」が育てられ「体力づくり」もなされてきたように思う。つまり自然な形での体の基礎作りがなされていたのである。だから、遊びといえばファミコンやカセットのたぐいで、体を動かすのはスポーツクラブでといったことが決しておかしくない現在、この子たちの家庭、地域では、そうした体力作りは期待できないのが当然と思わなければなるまい。とすると、学校がやはり中心となり、できるだけ考えていかなければならないということになる。

そこで、子どもが生き生きと楽しみながら健康なからだを作るには、どのような内容や方法が考えられるか、研究をすすめることにした。

④ コミュニケーションについて考える

本校では約8割の子が何らかのかたちでコミュニケーションに障害をもっており、近年は、特にことばのない子が多くなっている。したがって、発語を促し、関わりがもてるようなコミュニケーションをどのように考えていけばよいのかは、切実な問題となってきている。

ところで、わたしたちは、教師によって、つまり接し方、関わり方によって、子どもの

反応なり、態度、表情が違うことを見聞きしたり、経験している。そこから、子どものことばの障害を、単にその子のみの問題とせずに、その子を取りまく周囲の者（大人）との関わりの問題として考えることの大切さを感じている。

そこで、私たちは、インリアルに学びながら、子どもとの接し方について、実践、分析しながら研究をすすめることにした。

⑤　パソコン教材の利用について考える

今日、テレビゲームがブームの中、本校生徒たちについても、ゲームを楽しむ子が多いと聞く。ゲームのルール等が十分に理解できないのに熱中しているという。テレビゲームの魅力は何といっても映像や音声のすばらしさや変化があげられるが、それ以上に子ども側（操作者）の押しボタンやキー操作に反応してテレビ画面が変わるという双方向的な機能をもっていることが大きいと思われる。一方、こうした機能をもつパソコンが新教育機器として学校現場に入り、障害児学校や特殊学級においても活用されてきている。

そこで、今回、学習活動の中にパソコンを導入することによって、これまで以上の学習成果が期待できるのではないかと考えて研究をはじめることにした。そして、その利用のし方、その効果と問題点について考えてみることにした。

⑥　性指導について考える

何年か前までの性指導というと、子どもに応じたケースバイケースの指導がなされてはいたが、何か困った問題がおきると生活指導的に対処するといった消極的なものであったようである。したがって、目の前にいる子ども達が性についてどんな事を思い、あるいはどんな悩み、心配事を持っているのかといった事には、あまり思いが及ばなかったといえる。また、性指導は、男女の協力、いたわりあい、命の大事さを教える大切なものと認識しつつも、実際の所、自信のなさだけではない。何か敬遠したくなるような所があることも事実である。

こうした反省にも立ち、学習や日常生活の中で見聞する子どもたちの性感情や行動について、私たちはしっかり受け止めて話し合い、考えていくことにしたわけである。

⑦　食生活について考える（ＰＴＡ）

昨年は、親の目の届かない「登下校を見つめなおそう」ということで話し合いをした。今年は「子どもたちの心と体を作る食生活」というテーマで、偏食と肥満（小学部）食生活のマナー（中学部）食事と運動（高等部）の３つの観点から話し合いをすすめることにしている。

（浦田東作）